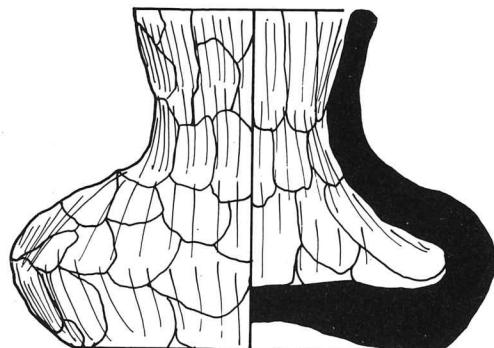


又久保

—長野県北佐久郡望月町又久保遺跡緊急発掘調査報告書—



1980

東信土地改良事務所
望月町教育委員会

序

望月町は、近年急激な開発事業に伴って緊急発掘調査が益々増大する現状にあります。

昭和53年度に行なわれました茂田井犬飼遺跡の第1次・2次、協和十二平A遺跡、そして本年度に於ける又久保遺跡、新水A遺跡・B遺跡、尾崎第4号古墳、大塚第1号古墳・第2号古墳などがそれで、いづれも国道バイパス建設工事とは場整備事業に伴うものであります。開発事業に対処する調査であるとはいえ、序々にではありますが町の古代史が明らかにされつつあります。

今回行なわれました発掘調査は、茂田井地区県営は場整備事業の施行に伴い、東信土地改良事務所の御協力のもとに、教育委員会が主体となり町直営方式で進めてまいりました。調査にあたっては、千曲川水系古代文化研究所主幹の森嶋稔先生を顧問にお願いし、調査団長に福島邦男氏、調査員に渡辺重義氏をはじめとする各氏、地元からは多くの作業員の方をお願いしました。梅雨時というのに大変な暑さの中、土と汗にまみれながら総力をあげての熱意あふれるお力添えをいただきました。ここに深甚なる敬意と謝意を表する次第であります。

これらの調査や研究の成果は、町の歴史の解明はもとより、地域研究の基盤となるものであります。本調査を期に、さらに文化財に対する意識の高揚が成されればよいと考えております。そして本書がその一助になればありがたいと思います。

本書刊行にあたり、関係各位に対しまして感謝の意を表するものであります。

1980年12月1日

望月町教育委員会

教育長 佐 藤 初 雄

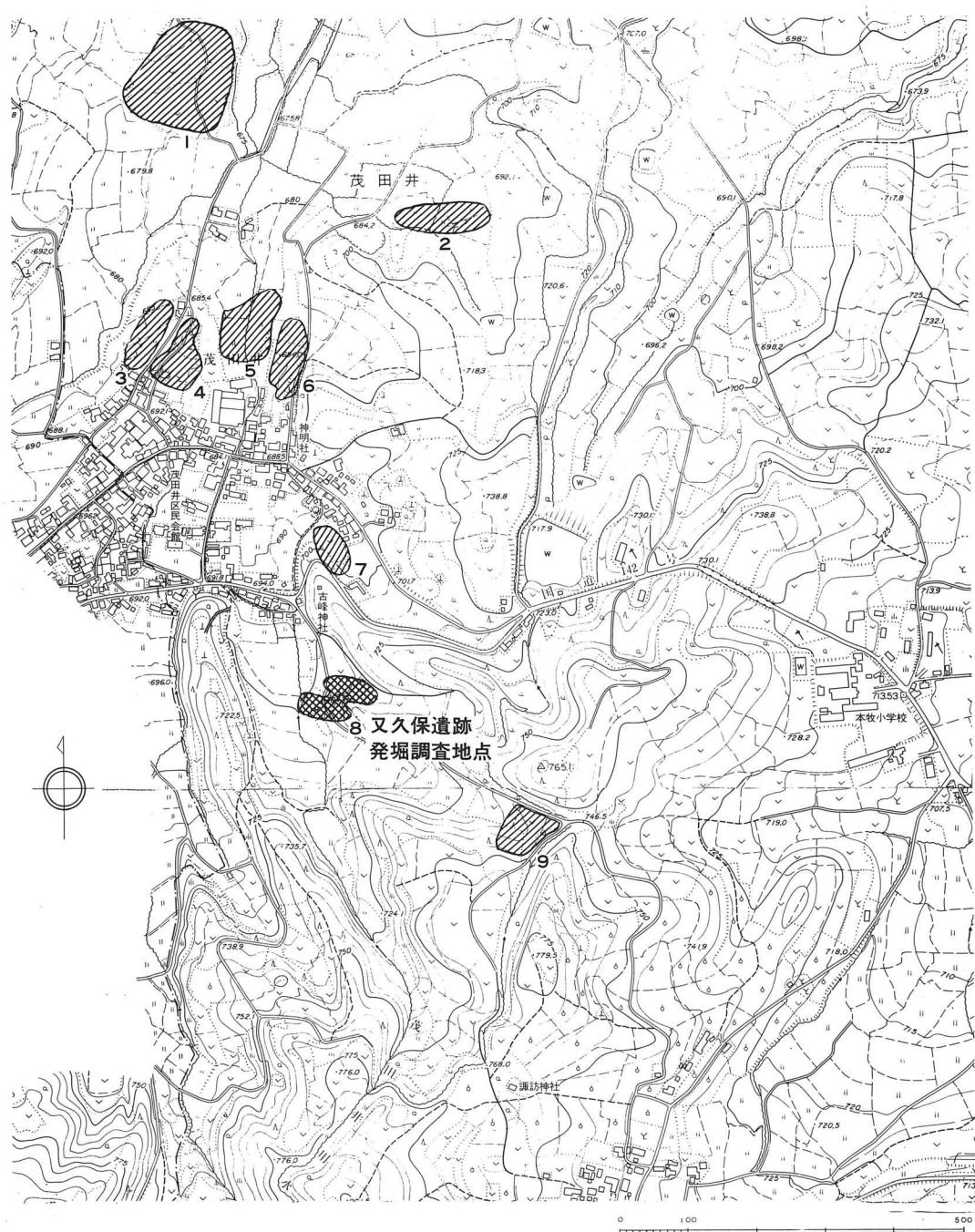


I 又久保遺跡緊急発掘調査の構成

1. 発掘調査委託者 東信土地改良事務所
2. 発掘調査受託者 望月町
3. 調査主体 望月町教育委員会
4. 調査遺跡名 又久保遺跡
5. 所在地 北佐久郡望月町大字茂田井字下又窪 2101・2109・2098番地
6. 調査の目的 茂田井地区県営は場整備事業の施行に伴ない本遺跡が破壊されるため、事前に発掘調査を行ない記録保存をはかる。
7. 調査期間 昭和55年6月9日から6月20日
8. 調査方法 3m × 3m グリッドによる平面発掘調査法
9. 調査面積 800m² (天神反遺跡、北畠B遺跡の立会調査面積 700m²)
10. 調査団の構成
 - 顧問 森嶋 稔 (上山田小学校教諭) 日本考古学協会会員
 - 調査団長 福島邦男 (望月町教育委員会学芸員) 日本考古学協会会員
 - 調査員 渡辺重義 (渡辺考古民俗資料館) 長野県考古学会会員
桜井 泉 (望月町春日) 長野県考古学会会員
花岡 弘 (小諸市教育委員会) 長野県考古学会会員
西沢 浩 (明治大学学生) 長野県考古学会会員
白倉盛男 (佐久市岩村田) 長野県考古学会会員
 - 特別指導 倉見イチヨ、土屋由美枝、吉沢弥太郎、大森英七、吉沢浩矣、土屋重雄、依田慎三、大沢礼市、武重礼子、武重美恵子、佐藤淳一、林泰男、岩下江美子、武重秀子、児玉妙子、今井とよ子、福島茂子、大塚米子、橋詰きよ子、大沢信次、倉見正三、櫻井卯作、寺嶋亮祐、関嘉津武、小林義治、比田井準市、小林すみ子、清水七五三子
 - 文化財調査委員 大沢洋三、岩下清海、鈴木 高、小野沢甚之丞、柳沢右三郎、桑沢俊雄、窪田俊朝、桜井貞男
 - 事務局 佐藤初雄(教育長)、内藤昭夫(教育次長)、高橋重雄(学校教育係長)、吉川徹(同和教育係長)、竹花謙一郎(公民館長)、松本莊雄、小林美枝子、平林一郎
 - 調査事務(社会教育係) 大森睦男(係長)、小林正利、上野早苗、小林辰男、福島邦男

II 調査に至るまでの経過

昭和55年度県営は場整備事業に伴う発掘調査は、昭和54年7月に現地協議を行なった春日新水遺跡と本遺跡の二件である。本遺跡と合わせて茂田井天神反遺跡、花立遺跡、用水尻遺跡等にもは場整備が及ぶることで昭和54年10月に独自に分布調査を行なった。その時地主柳沢右三郎氏が耕作している所で、耳皿及び手壇小形壺を発見したとのことで遺物を拝見した。本年2月に茂田井地区県営は場整備事業の施行に



第1図 又久保遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1 : 10,000)

1. 犬飼遺跡 2. 芳垣外遺跡 3. 花立遺跡 4. 天神反遺跡 5. 用水尻遺跡
 6. 北畠A遺跡 7. 前田遺跡 8. 又久保遺跡 9. 又峯遺跡

伴い対象となる遺跡の照会があり、2月22日に県文化課の関孝一先生、東信土地改良事業所、望月町文化財調査委員会、地主柳沢右三郎氏、望月町教育委員会の参加の元に現地協議を行なった。その結果、工事区域は天神反遺跡をややはざれるとのことであるがいちおう立合い調査、花立及び用水尻遺跡は、工事にかからないということになり、また又久保遺跡においては発掘調査を実施するとの指導を得た。さらに字北畠地籍にも僅かながら遺物の散布があり立合い調査を実施することとなった。2月27日に工事施行主である竹花組より立合い調査地区に工事が移るとの通報で、渡辺重義と福島とにより立合い調査を実施し、遺構及び遺物の無い事を確認した。その後又久保遺跡発掘調査の準備が着々と行なわれ、6月5日には文化財調査委員会と発掘調査団会議が開催された。また同日、学習会も兼ねて発掘調査作業員会議も開催された。

梅雨宣言もあったばかりの6月9日、結団式を行ない調査が開始された。

本年度、望月町における文化財保存事業として、特に埋蔵文化財の事業として本又久保遺跡緊急発掘調査、春日岩下地籍の新水遺跡緊急発掘調査、遺跡詳細分布調査の三件があり、開発に伴なう調査と、行先の開発に対処するための調査とが行なわれる。それぞれの調査の規模が大きく、しかも長期間に渡り、費用も莫大なものである。これらの調査に際し、とかく処理的な、しかも後退的な受け入れ態勢が多い中で、前向きで、当町上げての協力態勢をとることができた。行政処理と調査・学問との一体化された姿勢が表出してきたものといえる。ただ開発行為と文化財との問題は社会的問題として永久に残ると思われるが。

とにかく気持ちのよい調査態勢、協力態勢は、よい調査を行なうための基本であると思われ、調査の経過の一行に付け加えておきたい。

III 又久保遺跡の環境

望月町、立科町地区は佐久地方の西北に位置し、浅科村、北御牧村を含めて川西地区と総称されている。これらは蓼科山（2530m）を主峰とし、双子峰（2223m）、竜ヶ峰（1354m）等の北八ヶ岳火山群の最北西端の北斜面が緩傾斜し、その末端は望月＝立科地域における旧中仙道付近にまで延び、さらに、八重原、御牧原台地にまでおよぶ地域である。

この緩傾斜の斜面を鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川、芦田川が蓼科火山の裾野に深い峡谷を作つて北流しており、それらの間に多数の尾根がなだらかな丘陵状をなして幾筋か形成されている。

これらの山麓末端部と、御牧原・八重原台地の境界付近に旧中仙道が通過しており、遺跡は、望月宿と芦田宿の中間点、茂田井部落の南に当たる山麓尾根の小さな谷状地形の中に位置している。

又久保遺跡周辺の地質構造は、基盤は第四期洪積世小諸層群の分布地域であり、その最上層部である相浜層が谷間や断崖部に露出している。また相浜層最上部には蓼科火山の噴出碎屑物及び火山灰源のロームが堆積するという構成になっている。（火山灰は蓼科火山のものではないとの説がある。）

以上の地質構造の成す所は、国道142号線より又久保遺跡への入口部の宅地造成部にみられ、さらに発掘調査地域のトレンチ断層でも明瞭に観察することができた。すなわち、本又久保遺跡は、相浜層と蓼科火山の噴出物堆積面の基盤上に立地しているということができる。

（白倉 盛男）

IV 調査日誌

6月9日（月）曇りのち雨

昨日の入梅宣言通り、本日は朝から雨が降ったり止んだりのうとうしい天気であった。

午前中は下草刈り、テント張り、グリッドの設定を行なう。グリッドは東→西へA、B……、北→南へ1、2……とし3m×3mに設定する。午後1時より発掘調査団、文化財調査委員会、教育委員会事務局の参加のもとに結団式を行なう。その後第I地点のグリッド掘りを開始する。土師器、須恵器の坏、甕の小片が出土する。

6月10日（火）曇り

本日は作業を行ないやすい良い天気であった。

第I地点は、A-1、A-2、B-3、C-2、D-1、E-2、F-2グリッドを掘る。土師器坏、須恵器坏底部が出土する。第III地点は、B-1、B-3、B-5、C-3、F-3、H-3グリッドを掘る。B-3及びF-3グリッドより黒色土の帶状の落ち込みを検出する。また黒耀石のフレイクが出土する。F-3グリッドでは方形の落ち込みも検出する。

6月11日（水）晴れ

昨日に引き続きグリッド掘りを行なう。

第I地点は、A-1、A-3、B-2、B-3、C-1、C-2、C-3、D-2、D-3、F-2を掘る。梨久保式土器、土師器、須恵器の破片、鉄製品が出土する。C-2グリッドでは土層観察のため深掘りを開始する。第III地点は、C-4、C-5、D-4、E-5、F-2、G-3、G-5、H-3、H-6、J-6を掘る。土師器、須恵器の小片が少量出土する。B・C-3・4グリッド付近は当所からかなりの湿地であったが、下層より池のような黒色土の落ち込みを検出する。

6月12日（木）晴れ

梅雨というのに毎日大変良い天気が続き、予想以上に作業がはかどる。

第I地点は、昨日と同様のグリッドを掘る。C-2グリッドの深掘りの結果、予想以上に重機による攪乱が激しく、地山までにも深く入り込んでいることが解かった。ピット状の落ち込みが確認され、ここに入り込むように須恵器の甕形土器片が出土する。またC-3グリッドからもピット状の落ち込みが確認される。第II地点は本日よりグリッド掘りを開始した。A-6、A-7、C-6、C-7を掘る。A-7では砂質の岩盤がすでに表われる。第III地点は新たにD-2、G-5、I-5グリッドを掘る。また土手際で土層観察のための深掘りを行なう。遺跡全体の地形測量を行ない、本日で完了する。

6月13日（金）晴れ

第I地点はC-1、C-2、D-1、D-2、D-3グリッドを掘る。第II地点はA-6、B-5、B-6グリッドを掘る。第III地点はE-3、F-4、I-7、J-6グリッドを掘る。土師器、須恵器の坏、甕の小片が僅かに出土するが全体に遺構及び遺物量が少なくやや盛り上がりに欠ける。

6月14日（土）晴れのち曇り

調査開始以来雨無し日がさらに続いている。

第I地点はD-2、D-3グリッドのピット状遺構の再確認と平面での清掃、写真撮影を行なう。内黒坏と須恵器の坏片が出土する。A-1、B-1、C-1グリッドを地山まで掘り込む。第II地点はB-3、B-4、B-5、C-3、C-4、C-5グリッドを掘る。岩盤(相浜層)の地山がかなり広がり、その間に落ち込みを確認する。須恵器甕形土器片が出土する。第III地点は昨日に引き続きグリッド掘りと土層観察用の深掘りを行なう。この深掘りによって第III地点の原地形がほぼ確認される。

6月15日（日）晴れ

本日は作業員の方がやや少なく、あまりはかどらなかった。

第Ⅰ地点はB-3、C-2、C-3グリッドの掘り込みを行なう。また土層図をとるために6列（東一西）、C列（南一北）の土手を削る。第Ⅱ地点は引き続きグリッド掘りを行なう。その結果比較的小さな沢状地形の落ち込みらしいことが解かる。第Ⅲ地点は新たにH-8、I-9グリッドを掘る。本日で第Ⅲ地点の掘り込みは完了する。この結果、遺構が全く無いことが解かった。

6月16日（月）晴れ

本日は、本年度最高の暑さで7月下旬の気温とか。熱気に苦しめられながらの作業を行なう。

第Ⅰ地点はグリッド設定外地域（A-1・2グリッドの東）の拡張を始める。ここは重機による攪乱が少なく、遺物の出土量も多い。A-B、C-Dの土層セクション図をとる。

第Ⅱ地点は、沢状落ち込みの掘り込みを行なう。自然堆積状態がよく観察できかなり深い落ち込みである。遺物は何も出土しない。

6月17日（火）晴れ

作業員も以前の通り多勢となり、大いにはかどった。

第Ⅰ地点は拡張区の掘り込みを行なう。相変らず遺物が多く出土し、焼土、炭混りの土層が確認されカマドではないかとの所見に立つ。第Ⅱ地点の沢状落ち込みの掘り込みを行なう。その結果、予想通り小規模な沢（小河川）であることがわかる。水は適量に現在でも流れおりかなりの水たまりが出る。第Ⅲ地点は土層セクション（A-B、C-D）をとる。

6月18日（水）晴れ

第Ⅰ地点の拡張部分からカマドが検出された。カマド以外の床面などは重機による攪乱によりすでに削り取られてしまっていた。カマドの中央に灰釉陶器の皿形土器が上向きに展開して出土する。その他土師器の甕形土器を主体とした小片が出土する。第Ⅱ地点は掘り込みが完了し、セクションをとるための土手を清掃する。幅600cm、深さ180cm程のかなり危しい沢となる。第Ⅲ地点は昨日の残りの土層セクションをとる。

6月19日（木）晴れ

第Ⅰ地点においては昨日確認されたカマドの掘り込み、清掃、写真撮影および実測を行なう。このカマドも上部は破壊されあまり原形を止めていない。B-2、C-2、C-3グリッドより検出された土塙及びピットの実測を行なう。第Ⅱ地点は全ての調査を完了する。

作業終了後福王寺の調査員宿舎にて調査参加者全員により打ち上げ会を行なう。

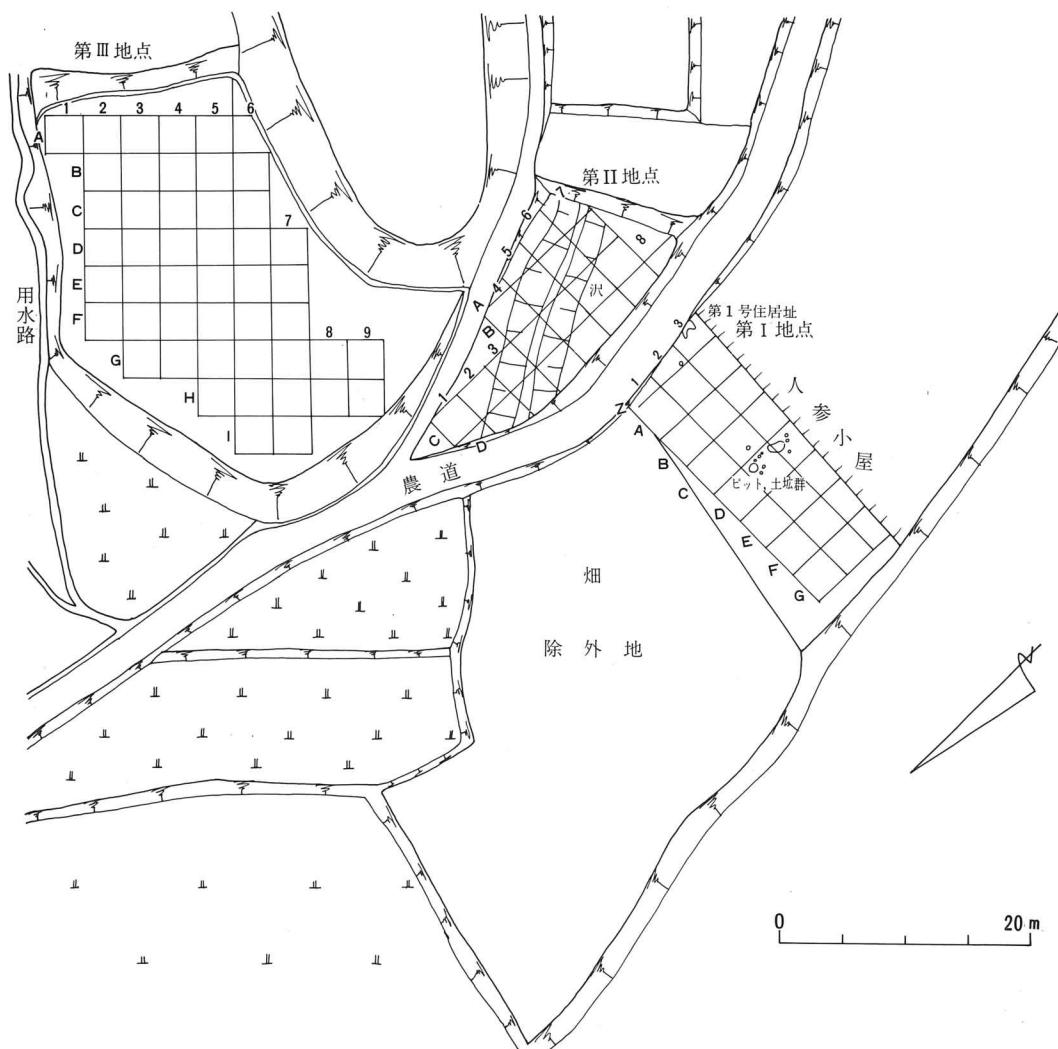
6月20日（金）晴れのち雨

第Ⅰ地点のカマドの断面図をとるため断ち割り作業をする。カマドの奥は農道下に入り込んでいるため作業が難航した。手前は石組みが現われていたが奥は粘土をはってありかなり固く締まっていた。遺物は奥ほど多く出土した。その後写真撮影、実測を行ない第1号住居址及び第Ⅰ地点全ての調査を完了する。

午前中から午後にかけて器材の撤去を行ない、本日で全ての調査を完了した。



第2図 第Ⅰ地点調査風景



第3図 又久保遺跡全体図（1：60）



第4図 又久保遺跡全景

V 遺構及び遺物

本調査によって検出された遺構は、平安時代の竪穴住居址1軒と土塙が2基、ピット8個があり、これらは全て第I地点に集中していた。また遺構とは異なるが、第II地点において自然の深い沢（谷河川）が検出された。第III地点では自然の沼（池）とも考えられるものが検出されたが的確性を欠くものであった。

遺物はやはり第I地点に集中し、平安時代のものが主体を成して出土したが、繩文式時代の遺物や近世陶磁器なども得られている。

各地点における土層の堆積状態は第5図～第9図の通りであるが、第II地点の沢内部の堆積を除いてはほとんどが地山直上まで自然堆積ではなく耕作による攪乱の状態を示している。

第I地点は、朝鮮人参の耕作のため重機による掘り起こしと、その後に於ける耕作の攪乱がされており、図中で示すものはいわば耕作層とでも言うものである。第II地点は沢は自然堆積を示すものであるがその上部は水田と畑の耕作層である。第III地点は自然地形を切りくずした所に水田耕作を営なんだものである。したがって又久保遺跡そのものはすでに大部分が破壊されてしまったと言うことができるのである。

1. 第1号住居址

(1) 遺構 (第10図、11図)

本址は第I地点の最東部、現在通っている農道際（一部農道にかかる）で検出された平安時代の竪穴住居址である。

第I地点は先にも記したが朝鮮人参耕作のために重機による掘り起こしが地山にまで達して行なわれたために遺構がほとんど破壊されてしまっている。本址は農道際に位置し、しかも柿の木が脇にあったため僅かカマドだけは破壊の難を逃れられている。他は全て存在しない。

このカマドは、幅80cm、奥行100cmを測り、石組みと粘土により構築されている。しかし両側の石は内部及び外部に移動しており僅かな石を除いてはほとんど原位置を保っていない。全体の様相から手前塁口部は石組みを行ない中央部から奥に向って粘土を貼ることによって構築されたのではないかとの所見に立つ。内部はあまり使用された形跡はなく焼土は僅かに検出されただけであった。

(2) 遺物

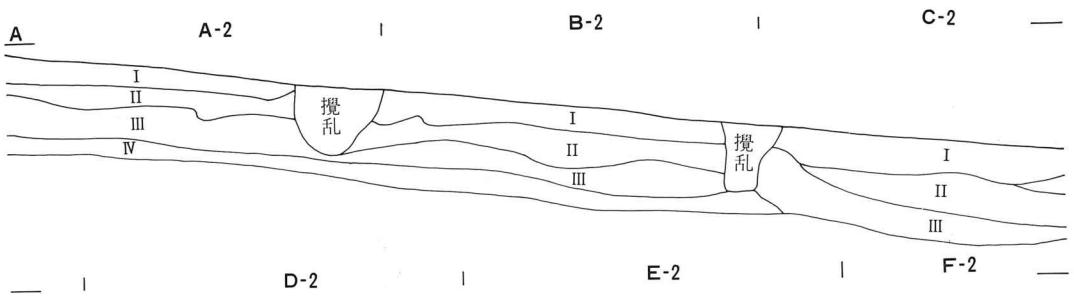
本址から出土した遺物は、カマドの内部を主体とし、さらに周辺部からもみられた。

これらの遺物は、土師器壺、内面黒色研磨の壺、内外面黒色研磨の壺、甕形土器、須恵器の壺、甕形土器があり、また灰釉陶器の良好な資料も出土している。出土状態は、カマド内部、特に塁口部付近と煙道付近に集中しており、破片で散乱しているという状態であった。その中で灰釉陶器は塁口部に正位で押しつぶれた状態で出土しており、約半分程欠損しているが優品である。またカマドの周辺部にも比較的多くみられ、焼土と炭混りの土層中に集中していた。

全体に出土量はあまり多くなかったが、内面黒色研磨の壺が圧倒的に多く、須恵器の壺がそれに伴うという状態である。

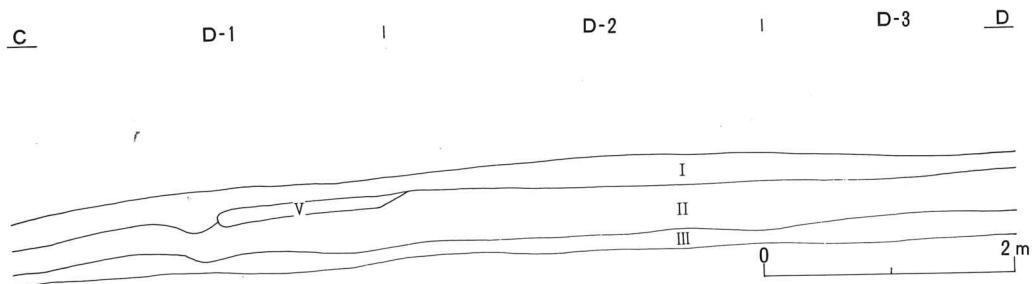
第14図1～6、8、10は土師器内面黒色研磨の壺である。本址出土の壺のうち大部分は内面黒色研磨である。7、9も壺であるがいづれも水引き整形痕が顕著である。また胎土に砂粒が多量に混入しており整形は丁寧であるがかなり荒い感を受ける。第15図3・4は須恵器の壺であるが、4は高台付きでかなり深いものである。内面は青灰色、外面は青茶褐色を示し胎土にはやはり砂粒が混入している。水引き整形痕

A-B (東西) セクション



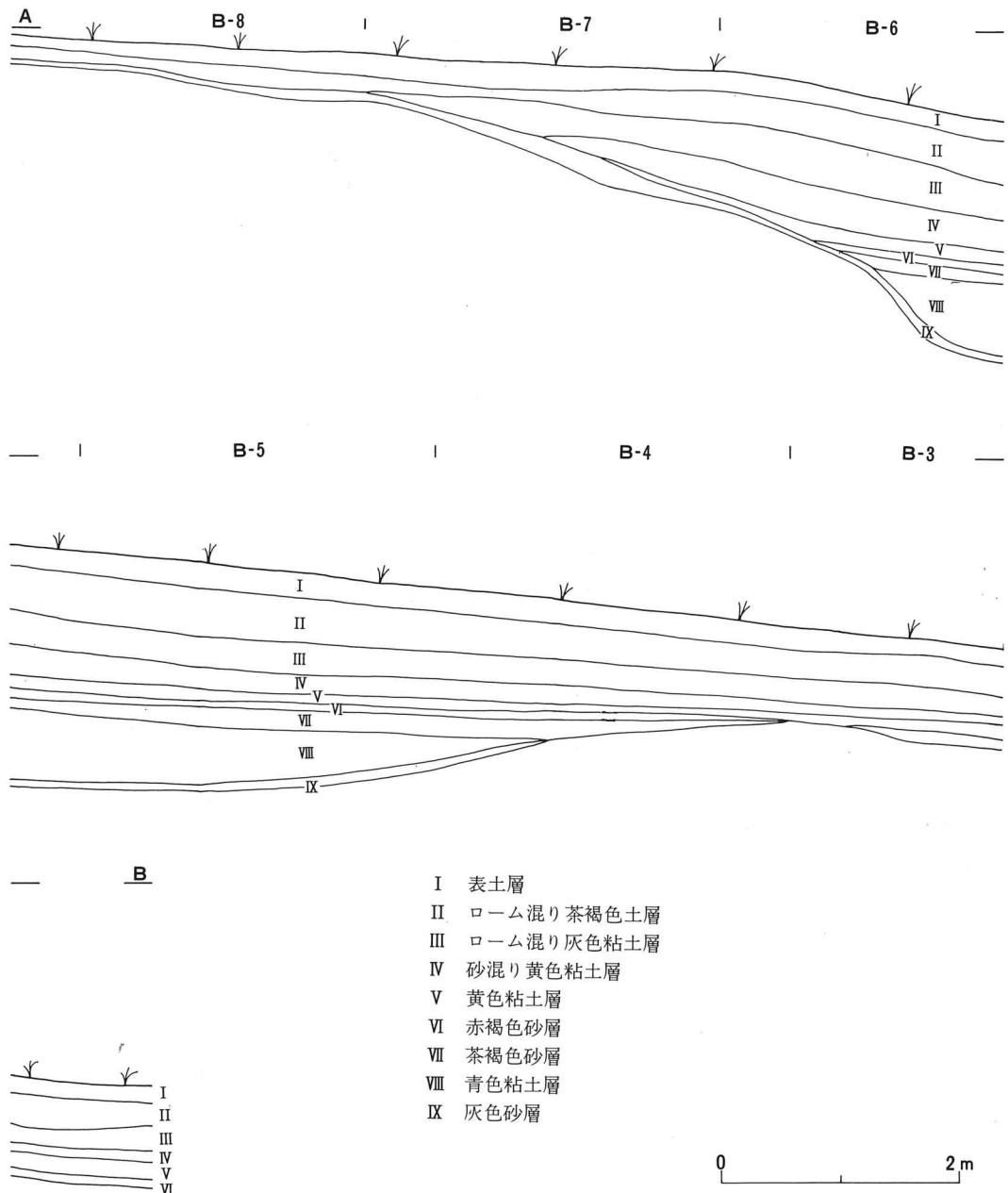
- I 耕作土
- II 黒褐色粘質土層
- III 黄褐色粘質土層
- IV 小礫混り黄褐色粘土層
- V 黄灰色粘土層

C-D (北南) セクション



第5図 又久保遺跡第I地点土層図 (1:60)

A-B (東西) セクション



第6図 又久保遺跡第II地点土層図 (1:60)

が特に顕著である。第15図1・2は土師器の甕形土器であり、2は内部に漆が残り赤褐色を呈している。漆塗りの甕であると考えるよりも、漆を入れた甕と考えた方がより妥当であると思われるが漆の上からの整形痕もみられる。甕から漆をかき出す時の痕跡とも考えられる。

2. 第1号土塙

(1) 遺構 (第12図、13図)

本址は第I地点のほぼ中央部のC-2、C-3グリッドにかけて検出された。掘り切り部は最大径151.8cm、最小径105cmを測り北東—南西方向に長いほぼ楕円形を呈している。深さは31cmを測るが、朝鮮人参耕作の時に地山を削っているので実際にはさらに深いものであったと考えられる。内部には円礫があり、その直上に鉄平石（輝石安山岩）が立ててあった。このあり方は、自然に流れ込んだものとみるよりあくまでも人為的に成されたものであると考えられる。土塙内部はかなり地下水が湧き出していた。

本址の性格は不明である。

(2) 遺物

本址から出土した遺物は、土師器及び須恵器の坏、甕の破片が僅かにあるにすぎない。

3. 第2号土塙

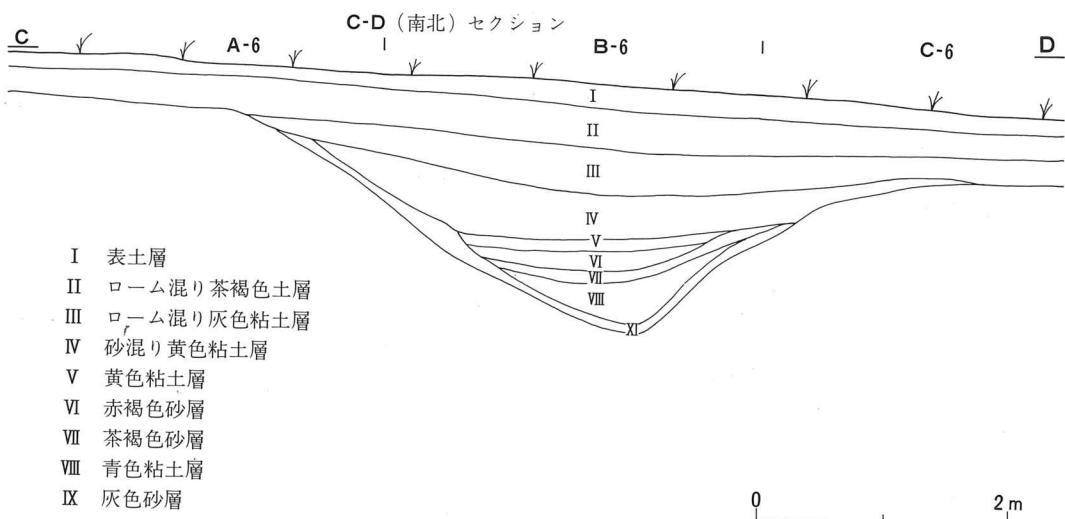
(1) 遺構 (第12図、13図)

本址は第1号土塙と同様第I地点の中央部、C-2グリッドより検出されたもので、直径80cm、深さ15cmを測り、平面はほぼ円形を呈している。かなり浅いが地山を削られているため本来はさらに深かったと思われる。底部はほぼ水平でかなり固い。

本址も性格は明らかではない。

(2) 遺物

土師器の坏の破片が出土しただけである。



第7図 又久保遺跡第II地点土層図 (1:60)

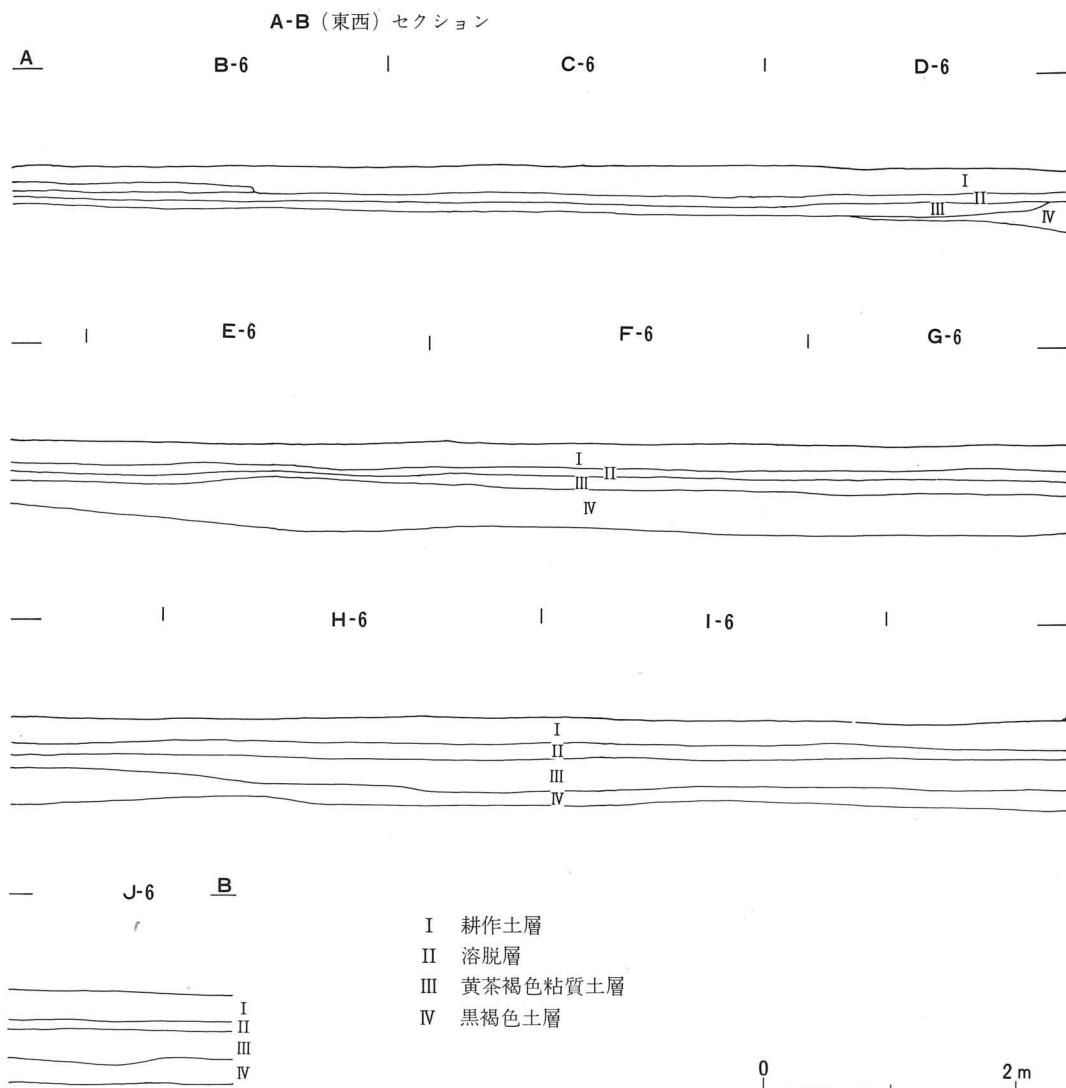
4. ピット群

(1) 遺構 (第12図)

ピット群は第I地点のほぼ中央部、B-2、C-2、C-3グリッドに集中して8個検出された。規模はさまざまであるが平均35cm~40cmの円形を成しているものが多く、深さは15cm程度である。これらは土壌の周囲に多くみられたが関連性は捉えることができなかった。また住居址に伴うものとも考えたが性格の異なるものであろうと思われる。

(2) 遺物

土師器の小片が少量出土したのみであった。



第8図 又久保遺跡第III地点土層図 (1:60)

5. グリッド出土遺物

グリッドから出土した遺物は、縄文式中期初頭の梨久保式土器細片、黒耀石製のコアー、平安時代の土師器、須恵器の壺、甕、灰釉陶器、鉄製品、近世陶磁器片などがあり、いづれも小片で量もあまり多くない。

これらの多くは第I地点に集中しており、第II・第III地点ではごく微量である。

6. 表面採集遺物

表面採集遺物の多くは、地主である柳沢右三郎氏が耕作中に採集したものである。

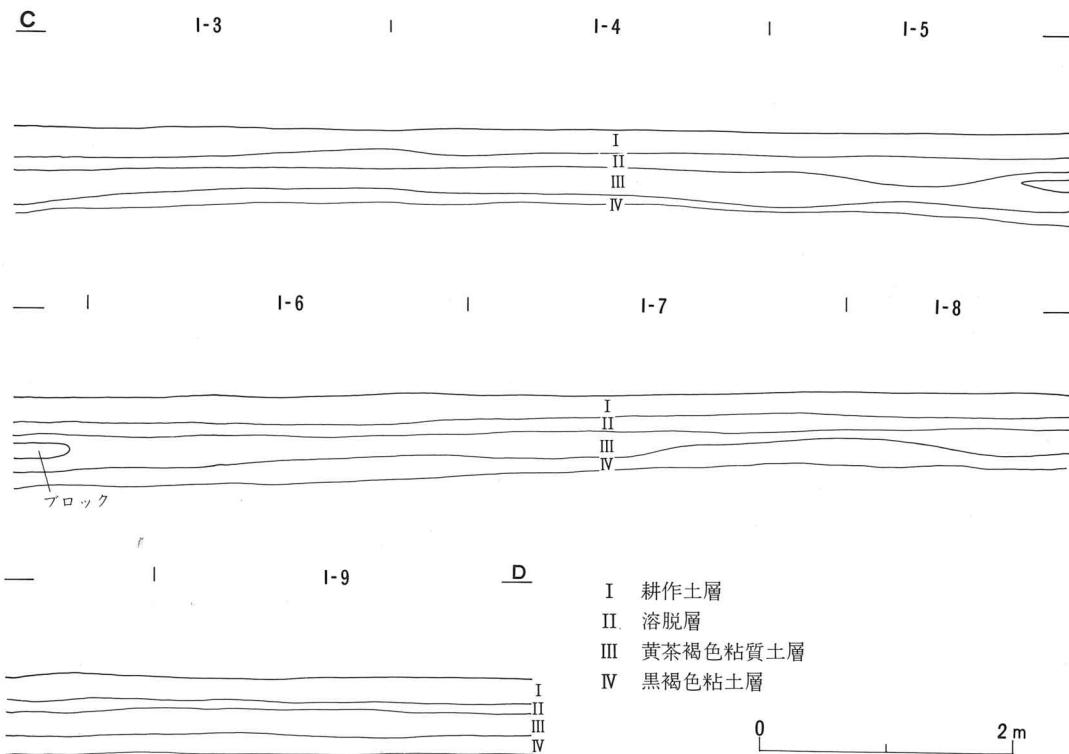
縄文式時代の打製石斧、平安時代～中世の耳皿、小形壺型土器、平安時代の土師器、須恵器の壺、甕、時期不詳の鉄製品（利器）などがあり、中でも耳皿と手壺の小形壺型土器が注目に値する。

耳皿（第18図の1）は、直径8cmの須恵器の皿形土器の両側を折り曲げて作ってある非常に小形のものである。全体にかなり荒い作りであり、特に高台が高いのが特徴である。

手壺小形壺型土器（第18図の2）は、高さ6cm、最大幅8.5cmを測る茶褐色をしたものである。内外面とも手びねりのかなり荒い作りであり、指頭痕が全面にみられる。外面は指頭痕をさらにナデによりなめらかにした痕跡がみうけられる。

耳皿と手壺小形壺型土器は、調査区第I地点の東方50m程の所でいっしょに出土しており、形態、機能から見て「祭器」として考えてもよいと思われる。

C-D (北南) セクション

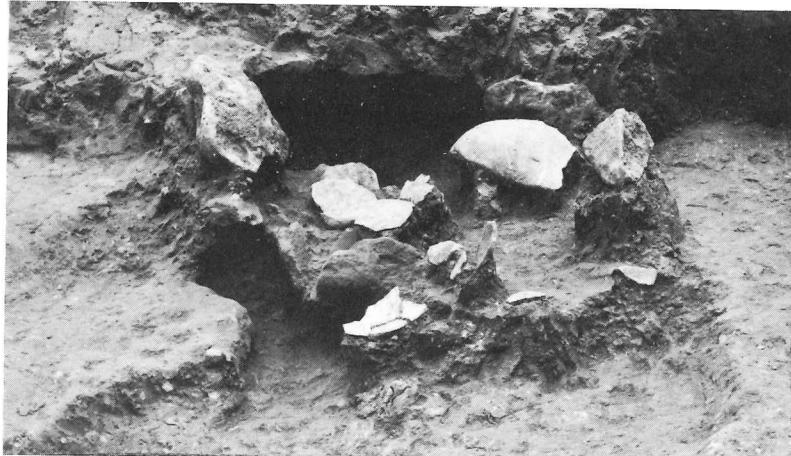


第9図 又久保遺跡第III地点土層図 (1:60)

7. 沢（谷河川）

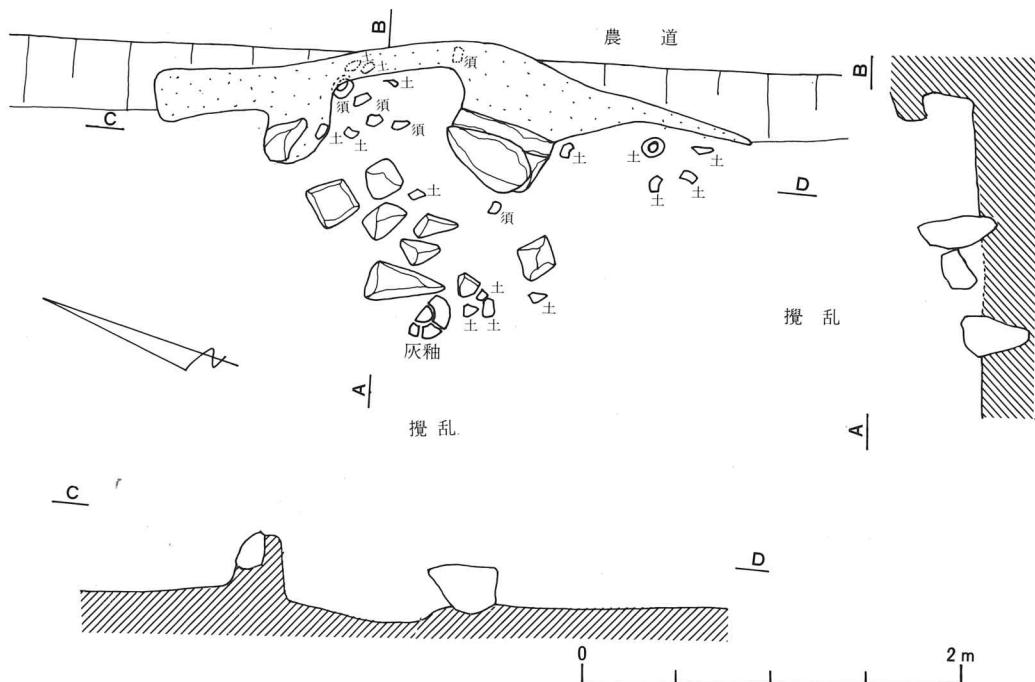
沢は第II地点において検出された。幅は600cm、深さ180cmと幅に比較するとかなり深くV字状に広がりをみせる危しい沢である。斜面の上方から下方に向かって急傾斜で下がっている。恐らくは又久保東方の峠である又峯付近から続いて来ているものと思われ、下流は又久保水田面にまで至っているものと考えられる。この付近一帯は水量が非常に豊富な所であり、調査中すでにこの沢には水が流れ出すぐらいであった。恐らく上方からの湧水が集まり浸食によって作り上げられたと思われる。しかも現在でも地下水の流路となっており、かなりの水量がある。沢ができあがったのは最近ではなく、恐らくは平安時代にはすでに存在していたのではないかと推定される。したがって本地域に生活していた人々はこの沢を利用していたとも考えられるのである。

自然の地形とは言え重要な所見を得ることができた。

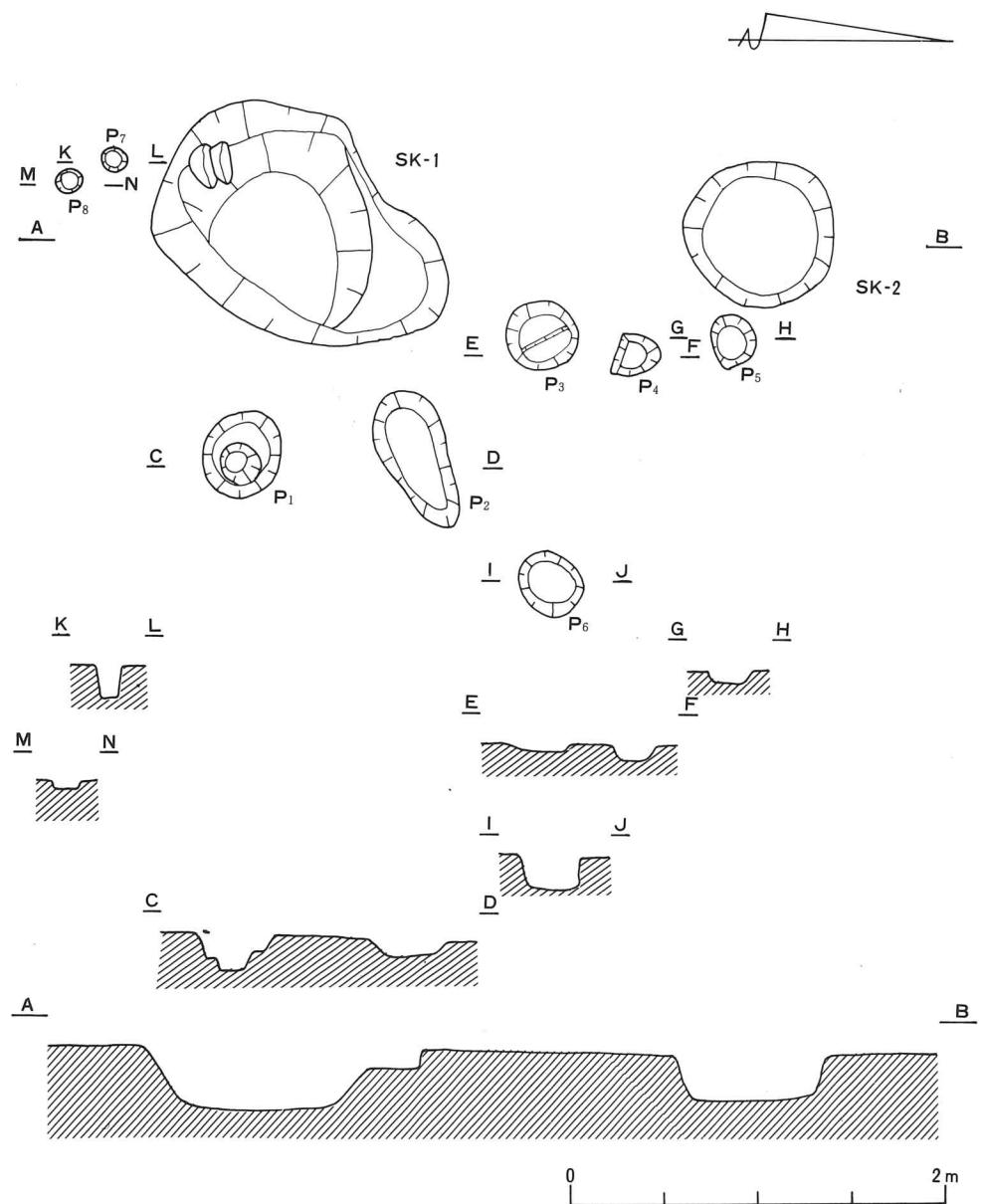


第10図

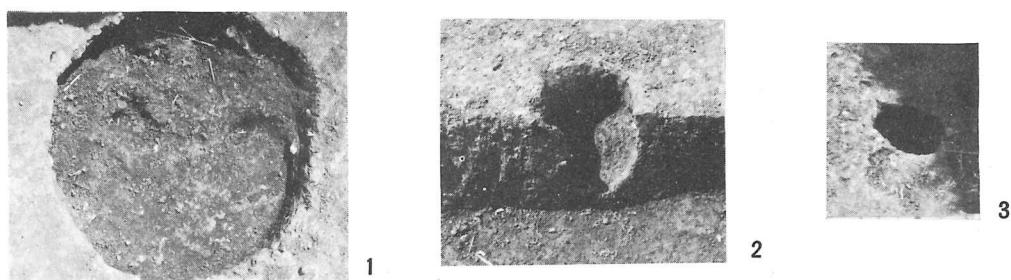
又久保遺跡第1号住居址カマド全景



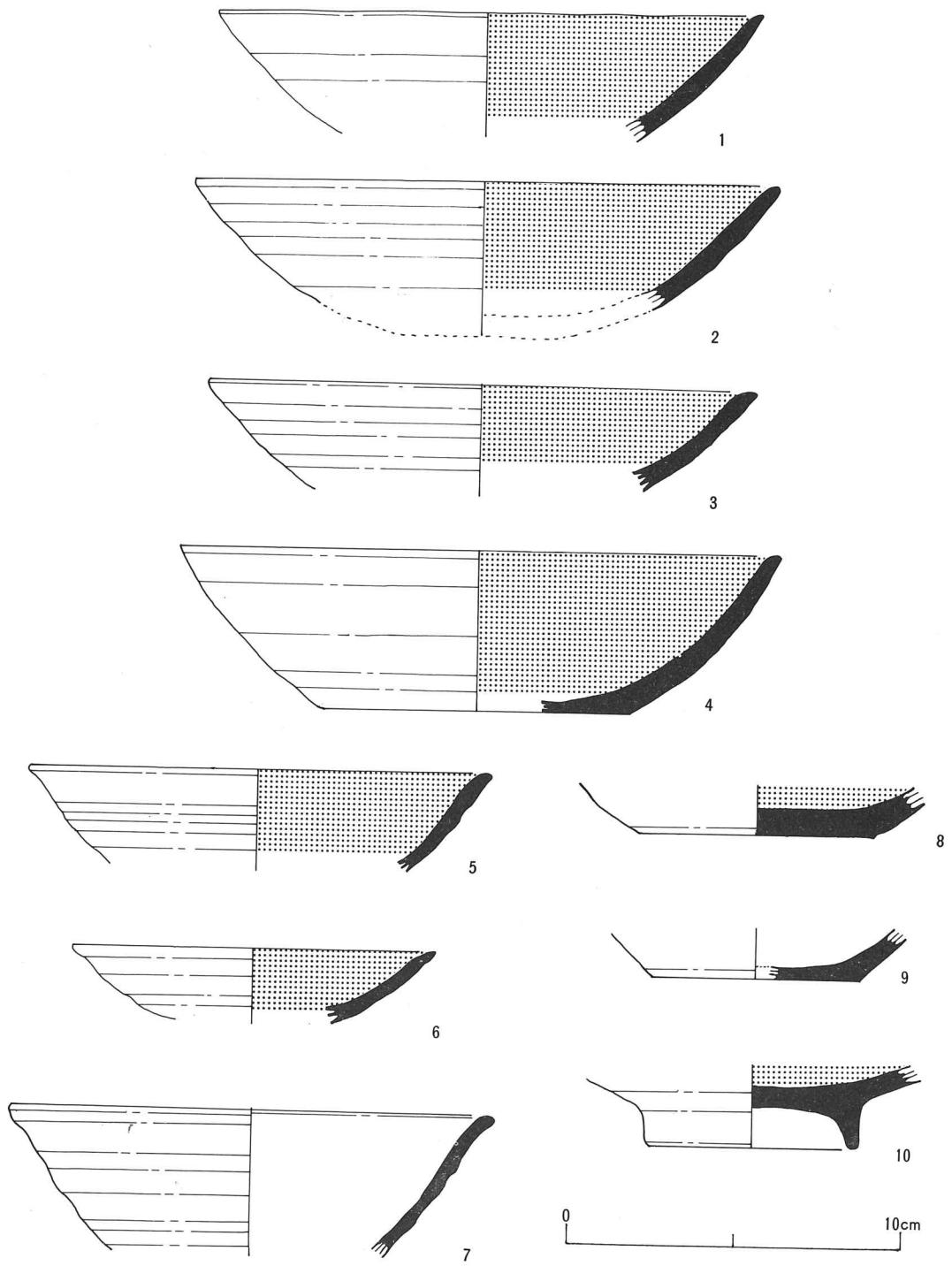
第11図 又久保遺跡第1号住居址カマド実測図 (1:40)



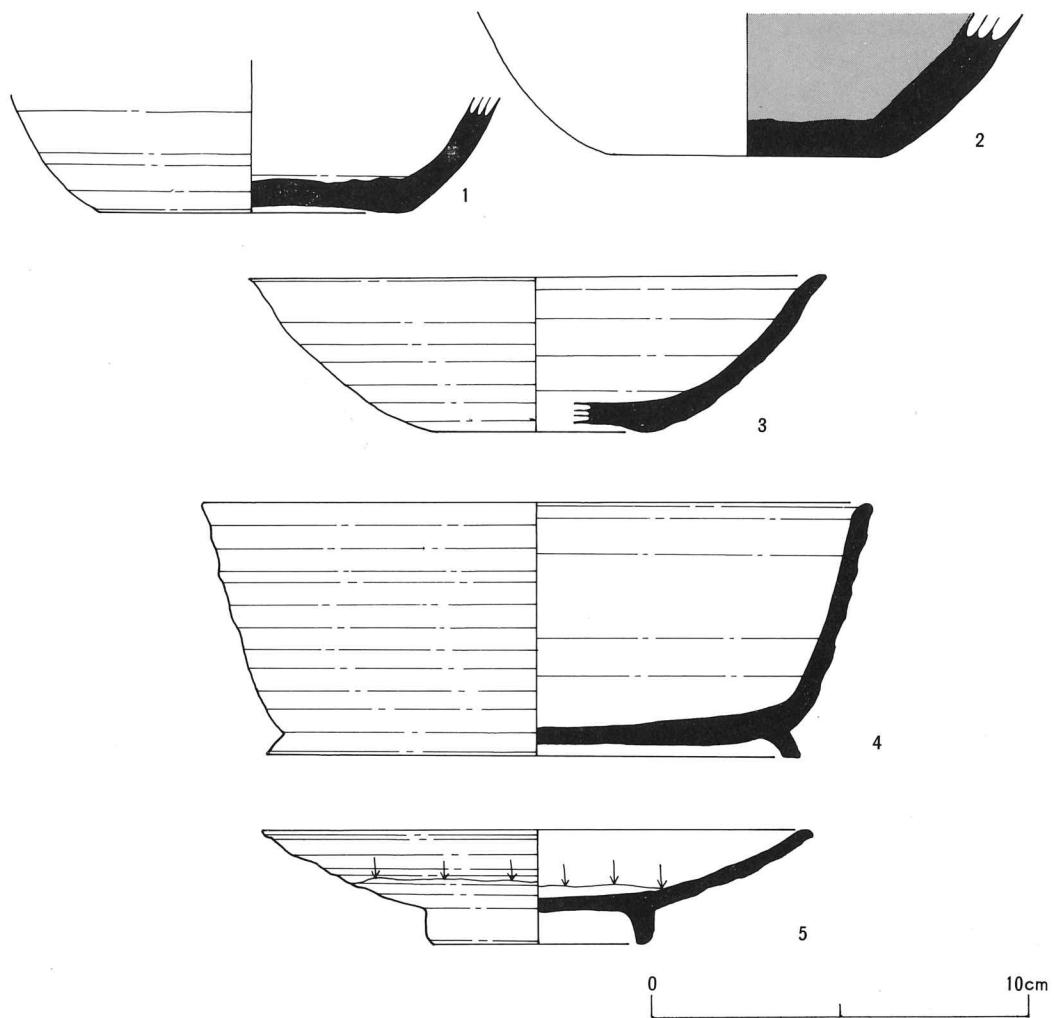
第12図 又久保遺跡第I地点土塙及びピット実測図 (1:40)



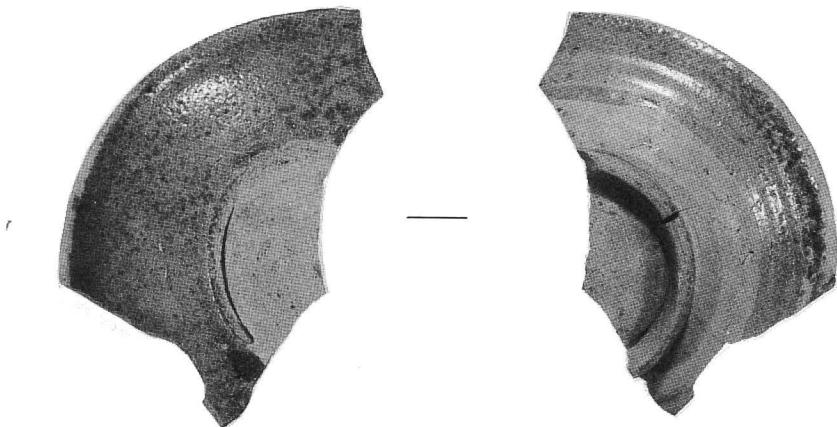
第13図 第I地点土塙及びピット (1. SK-2 2. P-1 3. P-7)



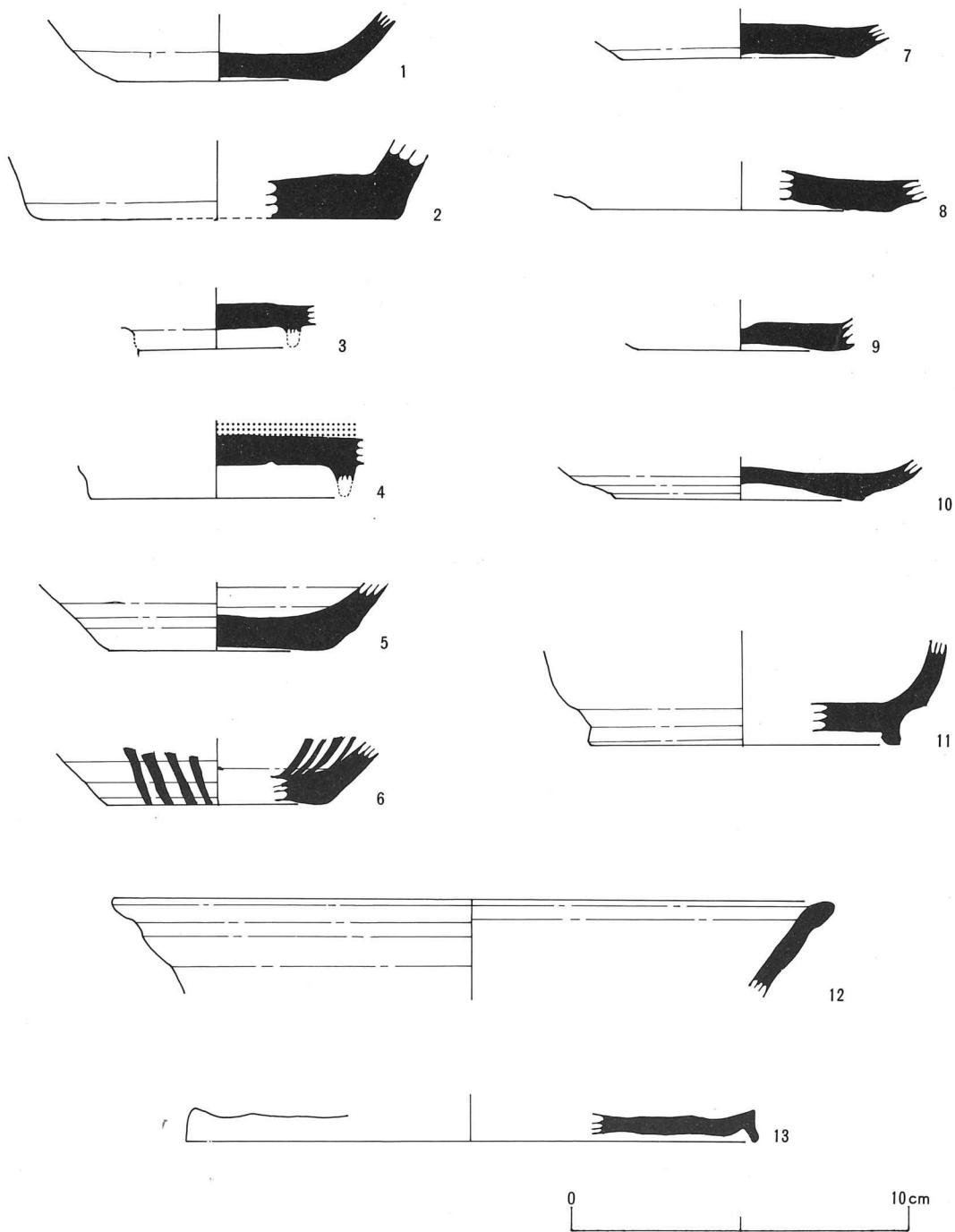
第14図 又久保遺跡第1号住居址出土遺物（1：2）



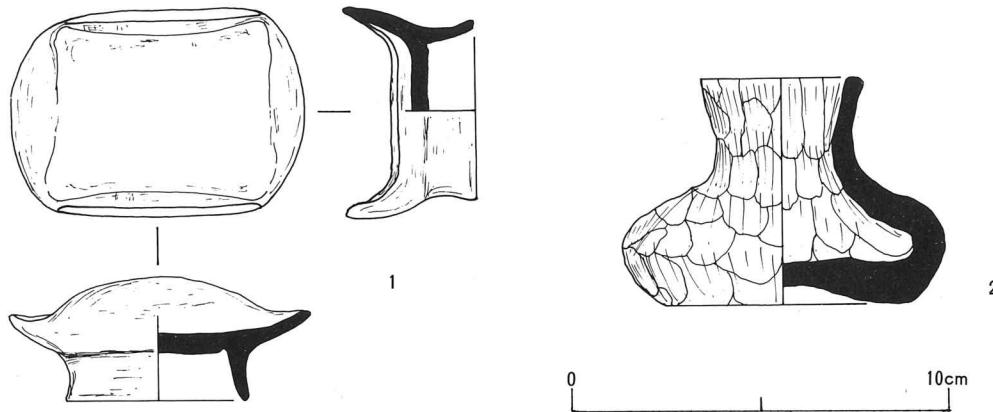
第15図 又久保遺跡第1号住居址出土遺物（1：2）



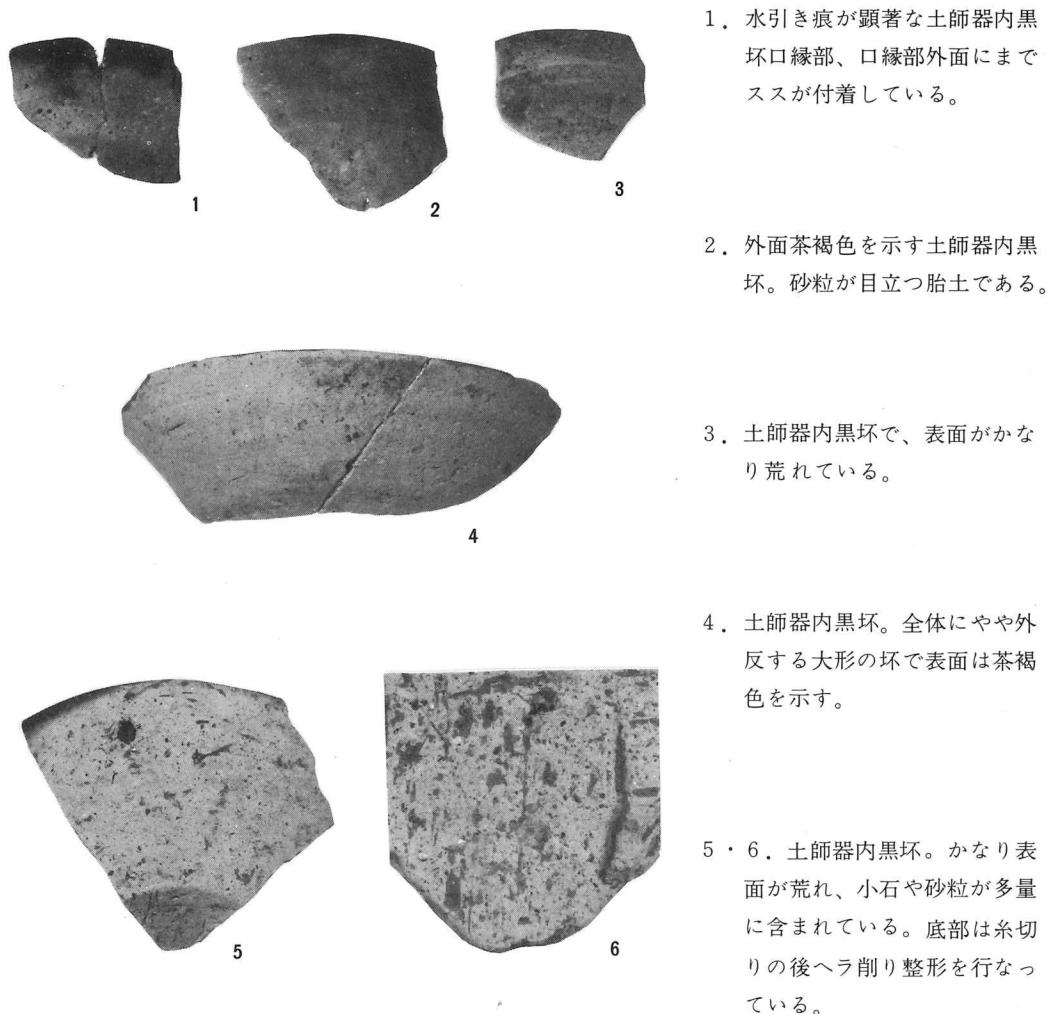
第16図 又久保遺跡第1号住居址出土灰釉陶器



第17図 又久保遺跡グリッド出土遺物実測図（1：2）

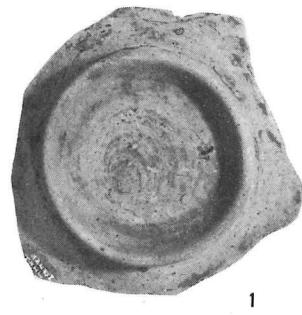


第18図 表面採集遺物実測図（1：2）



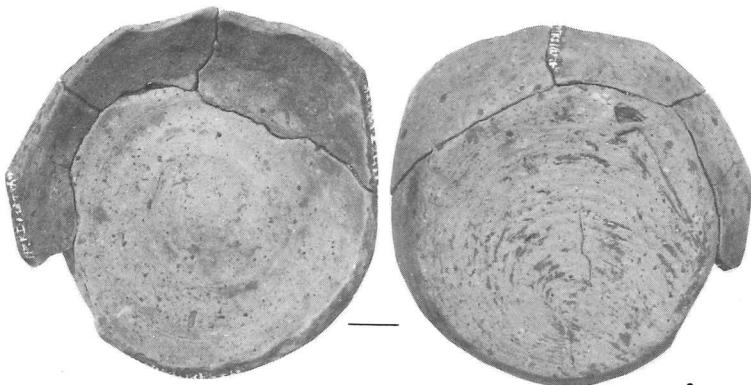
第19図 又久保遺跡第1号住居址出土遺物

1. 高台付壺の底部。全体に丁寧な整形が成されている。高台は糸切りの後に付けられておりかなり高さがある。内外面は赤褐色を呈している。



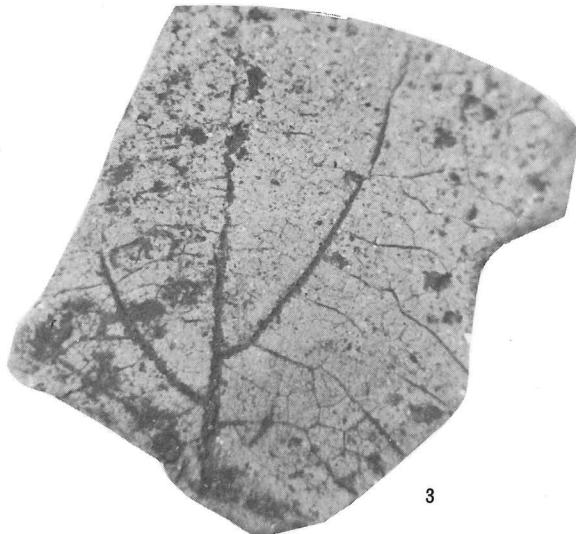
1

2. 土師器甕形土器の底部でロクロ整形により水引き痕が顯著である。底部には糸切り痕がみられる。かなり厚いことが特徴である。



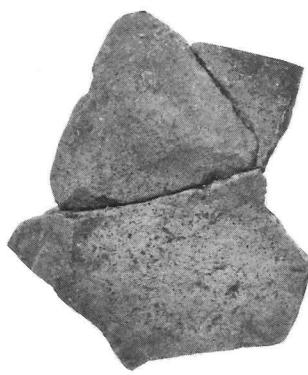
2

3. 土師器甕形土器底部であり木葉痕がある。比較的厚いがかなりもろい。



3

第20図 又久保遺跡第1号住居址出土遺物

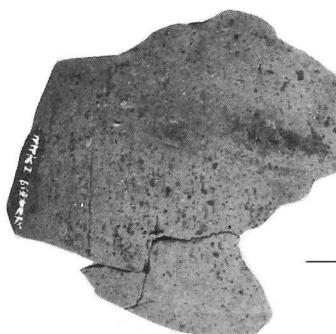


—

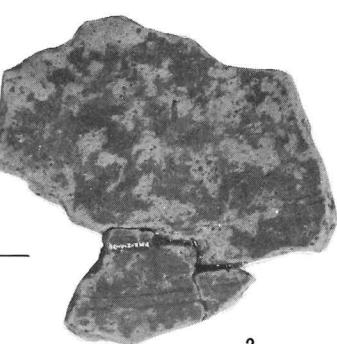


1

1. 土師器甕形土器底部。外面は茶褐色を示すが、内面は漆が残り赤褐色である。全体に厚く焼きもしっかりしている。

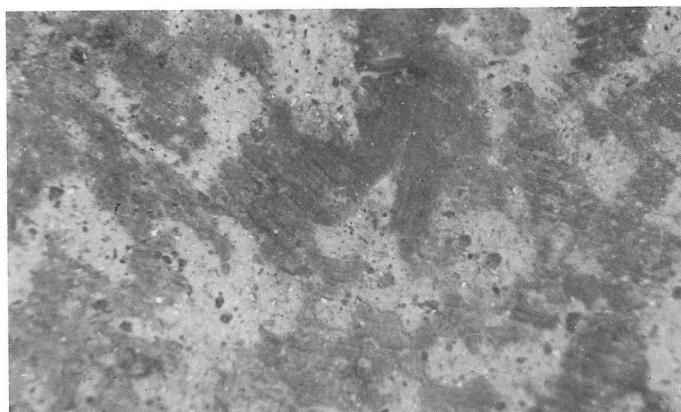


—



2

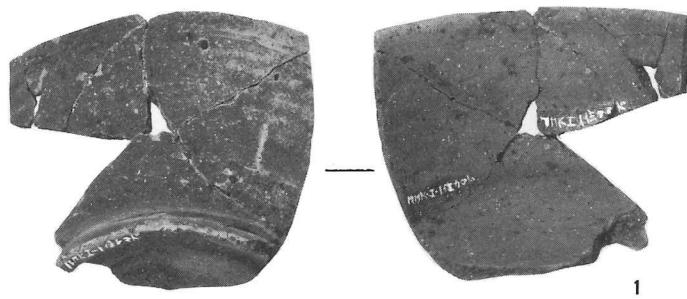
2. 土師器甕形土器の胴部で、外面は茶褐色、櫛歯状工具による整形がみられる。内面は1と同様漆が残り赤褐色を示している。かなり薄く、焼成は良好である。



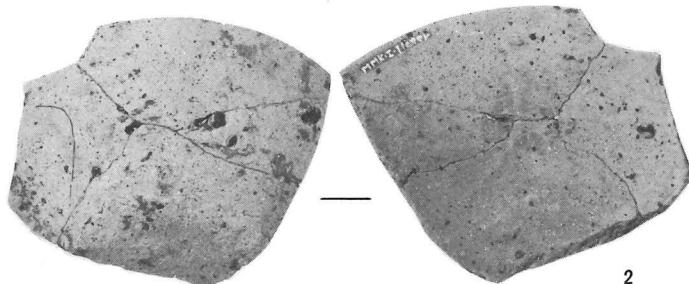
3. 2の内面の整形状態。漆を塗った後にヘラ状工具による整形が成されている。

3

第21図 又久保遺跡第1号住居址出土遺物



1. 須恵器の坏。他の器形に比べると底部から口縁部にかけての立ち上がりが急であり、しかも深い。ロクロ整形痕が顯著。糸切りの後高台を付けてある。



2. 薄く焼きがもろい。青白色を呈しており全体に磨メツしている。



3. 糸切り痕が顯著である。全体に丁寧さがない。

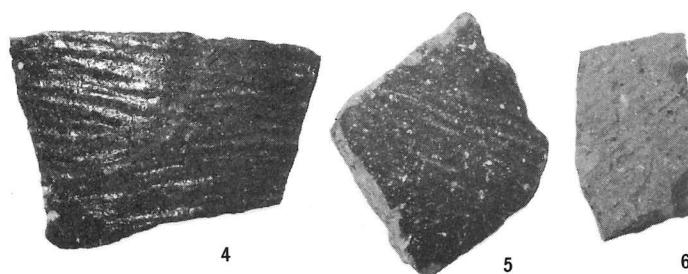


4. 坯の底部で、糸切りの後櫛歯状工具による整形を行なっている。

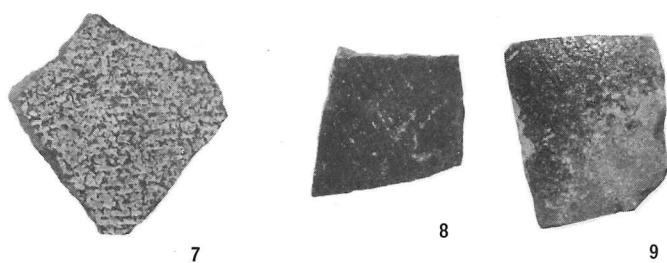
第22図 又久保遺跡第1号住居址出土遺物



1～3. 須恵器の壺蓋で3
を除いてはかなり薄い。
3は大きな遍平のつま
みが付いている。



4～9. 裹形土器の胴部。
4、5、8は外面が黒
褐色で9と共に自然釉
がかかっている。全体
にタタキ整形痕が顕著
である。内面は指頭に
より整形が成されてい
るものが多い。



10・11. 裹形土器口縁部。
かなり大型の器形にな
ると思われる。折返し
口縁、自然釉の付着が
目立つ。

第23図 又久保遺跡グリッド出土遺物

V 総括

又久保遺跡の「マタクボ」は、登録上そうなっているが、実際の字名は「又窪」と書くのが正しい。地名の通りこの地域は細かくみると三ヶ所の沢が東から西に下りやがて一つにつながっている。このうち地名の対象となったのは東側に向って南の二ヶ所の沢であろうと思われる。それほど深い沢ではないが涸れるこのとない豊かな湧水があり西方に下るにしたがって幅広く開けた地形を成している。まさしく「マタクボ」である。遺跡は開けた低地を臨むやや小高い所にある。

又久保遺跡は総面積が約2,000m²程あり、その多くは耕作のためすでに失われてしまっていた。また失われずに残されている部分は調査対象外であったということもあってあまり良好な状態で遺構等検出することができなかった。

遺物は地主である柳沢右三郎氏が第I地点東方の調査対象区外から耕作中に比較的多く採集しており、そこが遺跡の中心部であったと思われる。

検出された遺構は、平安時代住居址のカマドと2基の土塙、それにピット8個がある。土塙とピットは耕作によりかなり浅くなってしまっており、位置の法則性がなく不規則な状態であった。少なくとも住居址等建物に伴うものではないことは明らかである。

住居址に伴うカマドはほぼ主軸を東方に向けており、同望月町茂田井の犬飼遺跡第4号住居址の古いカマドや春日岩下の新水A遺跡第1号、2号、3号、4号住居址、新水B遺跡第1号住居址の各カマドと近似している。いずれも10世紀末から11世紀前半のものとみることができる。これら住居址の立地条件は、犬飼遺跡を除く全てが東から西への傾斜地であり、尾根もしくは舌状台地の中腹より下方に位置している。カマドが東側にあるという現象は少なくとも上記住居址に関しては、時期的な特徴ではなく立地条件、すなわち地形的な条件や制約による現象とみることができる。また形態は、この時期のものは石と粘土の組み合わせが多く、特に犬飼遺跡第4号住居址と新水B遺跡第1号住居址のように塁口部を石で作り、そこより煙道にかけては粘土で構築するというものに本址は近似している。

遺物はカマド内部及び周辺から土師器や須恵器の小片が多く出土しているが、特に煙道手前部分に集中していた。出土した遺物の多くは使用中に破損したと思われる破片であり、製品は住居址の廃絶時点ですでに持ち去ったと思われ、残された製品は塁口部に存在していた灰釉陶器の皿形土器だけであった。

又久保遺跡の立地環境は前記したところであるが、生活環境の一部とでもいう当時の沢を検出できたことは多大な成果であった。遺跡周辺はかなり豊富な湧水地帯であるが、その中でも検出された沢が中心的な水利であったと思われる。

本調査は破壊でなやまされ、その結果僅かな遺構と遺物の検出ができただけであったが、調査例の少ない川西地方の、とりわけ10世紀末から11世紀前半の重要な所見が得られたということができる。同茂田井の犬飼遺跡や協和の十二平A遺跡、春日の新水A遺跡・B遺跡など資料の増加に伴い、しだいにこの地域の一端が明かになりつつある。背後には御牧原台地の数十基にも及ぶ古窯址群、そして八重原台地に於ける古窯址群、浅科村上原地域に於ける古窯址群など膨大な生産源がひかえており、それらとの需要、供給の問題や各遺跡で多く出土する灰釉陶器の搬入の問題など多くの問題もかかえている。さらに望月牧（勅旨牧）とのかかわりあいなども重要な位置を占めている。庶民の生活と政治との関係も大きくクローズアップされるところである。

なお、本調査に付随して立合い調査を実施した天神反遺跡の北端部分、並に北畠遺跡の北端部分は、遺構及び遺物が検出されず、工事は遺跡中心部をはずれていることが確認されたので付け加えておく。

VII おわりに

梅雨時半ばにして、初日に雨が降っただけで15日間を通し真夏のような暑さを思わせるような晴天に恵まれ調査がここに完了した。

常に調査の中心となり御尽力いただいた渡辺重義さん、桜井泉さんをはじめとする調査員各位、そして、いつ出るかいつ出るかと毎日汗だくになりながらお手伝いいただいた作業員の皆さんに心から感謝の意を表するものである。調査に際しては適宜指導、助言をいただいた顧問の森嶋稔先生、地質指導の白倉盛男先生に感謝申し点ける次第である。また佐藤幸男町長さんはじめ望月町役場関係者の皆さん、東信土地改良事務所の皆さん、そして大変な事業を惜なく荷って下さった教育委員会事務局の皆さんに対し調査担当者として感謝申し上げる次第である。

埋蔵文化財発掘調査は規模の大小にかかわらず手続きから準備、調査、報告書作成まで多くの方々の協力と理解がなければ成しとげられるものではないと考えている。単に文化財保護法があるから実施するとか、研究者意識で行なうとかいう押し付け調査では片手落ちになってしまうと思われる。指導する者と地域の方々が一体となり、調査を通じ内容を探り合いながらお互いがお互いを高めていくことにより、より良い調査ができるのではないだろうかと思っている。その意味で大いに満足した調査であったといえ、感謝の念にたえないものである。

(福島邦男)

参考文献

- 福島邦男「犬飼遺跡緊急発掘調査概報」信濃考古45 1978
福島邦男「犬飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書」望月町教育委員会 1979
福島邦男「犬飼遺跡第2次緊急発掘調査概報」信濃考古50 1979
福島邦男「犬飼遺跡第2次緊急発掘調査報告書」望月町教育委員会 1979
福島邦男「十二平△遺跡試掘調査概報」望月町教育委員会 1978
「犬飼遺跡」望月町公民館報 203号 1980

新水A遺跡、B遺跡は1980年7月～9月に調査されたが報告書は本報告書に引き続き刊行の予定である。



第24図 遺物整理の様子



第25図 発掘調査の様子と参加者

又 久 保

—長野県北佐久郡望月町又久保遺跡緊急発掘調査報告書—

発 行 1980年12月1日

東信土地改良事務所

望月町教育委員会

印 刷 長野市西和田 信毎書籍印刷